

Heroldo de HEL

N-ro31 julio-aŭgusto, 1989

北海道エスペラント連盟

047 小樽市入船2丁目17-12

ORGANO DE

HOKKAJDA ESPERANTO-LIGO:

Irihune 2-17-12, Otaru, 047 Japanio

第53回北海道エスペラント大会へ

9月30日(土) / 10月1日(日) 札幌・北海道大学

札幌エスペラント会が総力をあげ、全道、全国のエスペラント組織・個人の協同と英知を結集して準備、開催した第75回日本エスペラント大会から1年が経過しようとしています。

北海道エスペラント連盟は当時、この日本大会の招致にあたって主体的対応を避けたものの、連盟加盟団体の札幌エス会にたいして連盟の人的、資金的、精神的な持てる力のすべてそそぎこんで札幌エス会の大事業に貢献できたことを誇りとするものです。それゆえ、わたしたちもまた昨年の日本大会に寄せられた全国からの友情と評価を札幌エス会とともに喜びあうものです。

1年前、あの大会を準備し、成功させた札幌、北海道のエスペランティストのエネルギーは今、どのように根づき、広がっているのでしょうか。

一部の人びとの危惧にも拘らず札幌、北海道のエスペラント運動は、日本大会を担った一人ひ

とりのエスペランティストの献身的な活動によって着実に、深く前進しています。今年の北海道エスペラント大会で、この1年間のわたしたちの前進を再確認しようではありませんか。

この大会に全道の地方会、個人会員はもとよりザメンホフの理想に共鳴するすべての人びとが集い、みどりの大地——北海道でのわたしたちの運動に未来への希望の道をさし示す盛大な大会となるよう心から期待します。

★第53回北海道エスペラント大会

第1日： 9月30日(土) 13時～20時

第2日： 10月 1日(日) 10時～12時

会場：北海道大学国際学術交流会館

(北大正門から入ってすぐ左側の建物)

【第1日】Eで歌う会、Eでの大おしゃべり会、世界E大会参加者講演会、図書販売、展示会、そして恒例 Gaja Vespero、クラーク像前での Paradizo ?

【第2日】北海道E連盟総会、北大ボブラ並木などへの散策。

【参加費】3500円 【不在参加】1000円
(ただし、Gaja Vespero に出席しない
実参加者は2000円)

《大会案内書等を別便で発送しました》

★趙承華氏歓迎会

札幌エスペラント会招待で札幌を訪れる中国・シェンヤン(瀋陽)エス会事務局長・趙承華氏の歓迎会が下記の通り開かれます。多数のご出席をお待ちしております。(趙氏の日程は2p. に)

9月5日(火) 18時から 札幌市職員会館で

(地下鉄東西線西18丁目下車1番出口すぐ)

問合せ先： 011-861-7564 木村喜壬治

シェンヤンの趙氏が9月に来道！

前号で6月来道を速報したものの諸般の事情で来道が延期されていた中国・ Liaoning (遼寧) 省シェンヤン (瀋陽) エスペラント会事務局長、ZHAO Chen-hua (趙承華) 氏が9月初旬に北海道を訪れることが正式に決まった。

趙氏の来道は、行政レベルでの姉妹都市であるシェンヤン市のエスペラント会と長年交流を続けてきた札幌エスペラント会の招待によるもので、滞在期間中に両会の姉妹エスペラント会提携についての協議がもたれるほか、札幌エスペラント会主催の歓迎会、例会出席、小樽、苫小牧などへの訪問も予定されている。宿泊も道内のエスペランチストとの交流を深め、日本人の生活を知ってもらうために、各地のエスペランチスト宅に民宿することになっている。

趙氏の主要日程 (予定) は右の通りで、札幌エス会はじめ各エス会会員が同行する。

9月3日(日)：ダーリエン (大連) - 成田を経て千歳空港着 (18:45 JAL 565 便)。

9月4日(月)：札幌市役所、中国総領事館訪問。

9月5日(火)：北海道開拓記念館、札幌芸術の森訪問。18時から札幌エス会主催の歓迎会 (札幌市職員会館 - 地下鉄東西線西18丁目駅下車)。

9月6日(水)：札幌・シェンヤン両エス会の姉妹提携の協議。

9月7日(木)：小樽市内見学。

9月8日(金)：札幌市内見学。

9月9日(土)：午後、札幌エス会例会に出席。

9月10日(日)：支笏湖めぐり。王子製紙苫小牧工場、苫小牧港見学。

9月11日(月)：千歳空港発 (9:20 JAL 502便) で東京へ。以降は川崎エスペラント会が応接。

9月14日(木)：成田空港発 (16:10 CA 952便) でダーリエンへ。

第30回東北大会へ 仙台、10月21日(土) / 22日(日)

昨年の日本大会 (札幌) に東北の仲間たちがたくさん駆けつけてくれたのは覚えていますが、そして、去年の東北大会 (福島市) には北海道から15名も参加しましたよね (ただし、全員不在参加)。今年も東北大会に参加して、なつかしい仲間たちとの友情と交流を深めましょう！ 板谷英紀氏の記念講演『宮沢賢治と語学』を聴くだけでも価値あり。

参加費： 3000円 (不在参加1000円)

干振替： 仙台 7-4231 東北エスペラント大会
連絡先： 仙台エスペラント会

980-91仙台中央郵便局私書箱120号
(宿泊等の問い合わせは上の仙台エス会まで)
北海道大会でも参加を受け付けます。ちょっと無理という人は不在参加と寄附を。

宮本正男の本 Miyamoto masao 追悼広告

Sarkasme kaj entuziasme 1,500円

E-ujo の西欧中心主義を撃ったエスペラント論集。民衆語論、書評論、そして I. ラペーナ博士さえ彼の俎上に。峰芳隆編、79年、La Kritikanto 社刊、151p。

JAPANAJ VINTRAJ FABELOJ 980円

Miyamoto生前最後の本。国際旅団リンカーン大隊の戦士としてスペインの土となった函館生れのジャック・白井のこと、現代日本の E-ujo への痛烈な提言 “E-sindromo” など雑誌に発表された15編。吉川契一編、89年、SAT刊、153p。

北海道大会でも販売。書店注文の際は「日本エス学会発行」と指定のこと。

苫小牧 星田 淳

S-ro 宮本正男が重体との話は前から聞いていた。「検査結果は聞いてないが、胃か食道のガンに違いない……」と彼から手紙が来たとき聞いたことがあったが、悲しくも彼の勘は正しかった。

La Movado に彼が書いた「自分史」にも出ていたと思うが、彼がエスペラント（以下E）を始めたのは、社会変革のための国際連帯の手段としてだったと思う。戦後派エスペランティスト（E-isto）の私の場合、戦争を繰り返さぬよう再び政府にだまされないように、直接世界を知りたいとの思いからだった。戦前の彼の運動は、圧倒的な国家権力の前に挫折したが、戦後の再出発にあたって彼の心の底にあったのは、やはりこの挫折を再び繰り返さぬ決意、即ち自分の『転向』に対する自己批判だった。「一生の不覚」と彼は悔やんでいたそうだが、そうしなければ獄中で終戦まで十数年耐えねばならなかったかも知れない。

「今度はこれを繰り返すまい。自分で納得した行動しかしない——」と彼は決意したようだ。

Naskita sur ruino で描かれた、沖縄の捕虜収容所でのストライキ。「アメリカは民主主義の国ではないのか！」という異議申立てはその前哨戦だったのだろうか。彼は色々なことを主張し、かつ実行した。成功も失敗もあったが、よく先を見通したものが多かったと私は思う。まず戦後の日本E運動再建。民主的な全国組織としてつくったJEA〔編集部注：第二次日本エスペラント協会〕は結局失敗し解散。この経過を批判的に総括した彼の文で私は初めて彼を知った。では「足もとから固めよう」とKLEG〔関西エスペラント連盟〕を組織、機関誌 La Movado を武器に拡大。

1950年代初め会った頃の彼の主張、日本文学のいいものをEで紹介しよう——は結局「誰もやらんなら俺がやる」となったが、この結果、世界に日本のE作家 Miyamoto の名を知らせることになった。「E-istoなればこそ出来る仕事なのに、なぜやらないのか?」。彼の問いかけが今も重く心

に残る。続いて La Movado誌上で提唱された「専門家になろう」もこの延長線上にある。「私はEでこれをやる、という専門をもとう。単なる文通、会話だけでEの意義を世界が認めてくれはしない。Eだからこれが出来る、といえるものをやろう」との主張は今なお考えるべき問題だ。

忘れられないのは彼のスターリン主義に対する異議申立てである。戦前、非合法の共産主義者だった彼にとって、社会主義国でのE弾圧は見過ごせる問題ではなかった。「ミソもクソも一緒に禁止する社会主義国が間違っているか、我われが間違っているか、一体どっちなんだ」という彼の問いかけは悲痛なひびきがあった。結局、この問題は、今進行中のペレストロイカで見直されるまで、持ち越されたのだが。

E-ujo の西欧中心主義を撃った Sarkasme kaj entuziasmeでも見られたように、いつも物事の本質に迫り、納得出来ないことに対して「異議申立て」をする彼の行動に我われは多くのことを教えられたと思う。「靈魂の不滅」など信じてもいなかった彼の冥福を祈るより、生きる我われが彼の示したものをどう生かすかを考えることが大切ではなかろうか。

言 卜 幸 辰

関西エスペラント連盟会長 桑原利秀氏

関西エスペラント連盟顧問 宮本正男氏

関西連盟会長・桑原利秀博士（79歳）が6月14日午前、同連盟顧問の宮本正男氏（76歳）が7月12日未明、相次いで闘病中の病院で逝去されました。ご遺族と関西エスペラント連盟に謹んでお悔み申し上げるとともに、両氏のご冥福を心よりお祈りいたします。

北海道エスペラント連盟

小樽 山本昭二郎

三宅先生、小林司さんとの出会い

1953年春、25歳の私は生まれて初めて単身、津軽海峡を船で渡り東京に向った。全く聴力のない surda の私は、人見知りをするし、人とはまともに会話出来ないから不安一杯の旅だった。丁度東京に次兄一家が移住したばかりで、東京見物に出て来ないか、案内する、というので、わくわくする心地で上京したのである。どうやら上野駅でうまく出迎えの兄と会えたらしい。新宿から京王線の下高井戸駅で降り、無事8畳1室のアパートに着いたことを覚えている。4歳の姪と兄夫婦のそこに1週間程滞在した。2~3日は鎌倉や三越、銀座など案内してもらったが、この旅の目的の一つは東京医科歯科大学の高名な耳鼻科の医師の診察を受けるためだった。

この病院はお茶の水駅のあたりで、当時、日本エスペラント学会もこの近くと判ったので、ある日、のこのこと出かけて行った。その日は木曜日だった。古い木造の個人病院みたいな造りだった。「何ですか?」と出て来たのが若い女性で、上が白のブラウス、下が藍のひだスカートの美人。優しい目をしていたので安心して「三宅史平先生はおられませんか。北海道の小樽から出てきた山本と言います。実は私は耳が全然聞こえなくて……」と説明、了解していただいた。「三宅先生は間もなく帰られますから、暫時お待ち下さい」とメモしてくれたので、入口横の書棚のエスペラントの販売用本などをみていた。私が気づかないうちにいつの間にか三宅先生帰着。かの事務の女性(加沢絹子さん)に引合わせて頂いた。

三宅先生は一瞬当惑されたようで、どう応接してよいか判らない様子。丁度机の上の雑多な書籍

のあたりに、私がつい先日発送したばかりの小樽エスペラント協会発行の LEONTODO が封切られてあったので、異国で知己に会ったように嬉しかった。三宅先生は口が重い人のようで、あとで小林司さんが「三宅先生は良い人ですが、社交的なことはニガ手だから誤解しないように」と言われ、なるほどと思った。

「小林司さんと上京したら会う約束なのですが、どこに連絡すれば会えるのですか」と伺ったところ、加沢さんが三宅さん(以下先生略)の奥さんにきいたり、三宅さんと相談したりして、やっと東京都立病院のインターンをしていると判明。ようやく連絡ついて、「早退して行くから待っていて」とのこと。この時の電話で、「山本君は耳が……」と三宅さんが説明されたらしく、間もなく会えたときは割合スムーズに話が出来た。小林さんは当時24歳くらいか、新潟大学医学部在学中からエスペラント運動には熱心で、遠くの北海道の LEONTODO に声援と原稿を送ってくれた。ペンネームは朝比賀 昇で、「緑星の由来」など継続的に寄稿して下さった。

外に出て二人で簡単な夕食をしたが、今日は木曜日なので例会がある、veteranoj に紹介するからぜひ出席しなさい、とのこと。いま思いだと赤面してしまう。

夕方の例会には、当時の有名なエスペランチストがたくさん出席されていたが、私の記憶しているのは、三宅、小坂、磯部(女性と少年)、石黒(同名二人)、福田、伊東 k.t.p.。私は耳でエスペラントを聴いたことはなかったが、小林さんに紹介され、それでも Esp. で簡単な saluto をしたところ、皆さん如才なく拍手してくれて嬉しかった。この時の samideanoj も、いつしか大半

が故人になられ、たった一度しか会わなかったのに、今でも私の追憶の中で生き生きと生きている。

『初期の世界語』出版と返本の経緯

この時がきっかけで、小林さんの韓族で小坂^{おさか}狷二先生のたくさんの著作のうち数点をガリ版印刷することになった。『国際語近世史』（小坂）を皮切りに『初期の世界語』（小坂）、そして『エスペラント運動便覧』（小林）などである。当時の私の職業は荷役人夫で、日中は黙々と肩荷役の重労働をし、帰宅してから LEONTODO の原稿をガリ切りし印刷していたが、すべて我流で字体も製本もプロではなかった（名古屋の三石 清さんが小樽に来られたのは、この1年くらい前で、一緒に荷役の仕事をした。今もお元気と思うが）。

今から10年位前、関西の峰芳隆さんという方から手紙が来た。山本が以前印刷した『初期の世界語』、『国際語近世史』など残部があったら譲って下さい、最近こういう文献を再研究するようになったので、という。調べたら関西連盟から返本されたのがたいぶあり、正誤表とともに送本した。

この返本のいきさつは、『初期の世界語』がやっと出来上って、ともかく関西連盟に送本した。ちょうどその頃、千里丘陵とかで日本エスペラント大会があり、それに便乗して販売してもらおうと思って。ところが、値段など判らず、私は実費でよいと思ったが、小林さんはその3倍くらいの定価にするよう助言してくれ、たまたま学会の加沢さんも大会に行くというのでよろしく、と依頼した。ところが、関西連盟の御大将の宮本正男さんが立腹し、「大阪から千里までどんなに遠いか、迷惑千萬。売れた本代から送料を差引き、残部は返本する」とのこと。その通り、間もなく残部が返送されてきた。それをまたまた関西の若い人たちが使うという、勿論、私は喜んで送った。

そういう訳で、私も氣勢をそがれ、以降、小坂先生の膨大な著作にはタッチしていない。あの頃は「減私奉公」の純粹な気持でエスペラント運動に私なりに努力していたのだが、「金儲けでエスペラントをやっている」と思われたらしく、私はすっかり意欲をなくしてしまった。あの頃の私なら、おだてられれば小坂先生の著作をあと何点か手がけただろう、と思う。

でも私は、宮本正男さんの偉大なる足跡とその光芒を讃える一人である。先頃、病篤し、と星田淳さんからきいたが、もう健康体になられたろうか。私は大阪が好きで何回も行っているし、今は娘夫婦と孫たちも大阪（枚方市）にいる。機会があれば、関西連盟を訪ねてみたい。

(つづく)

【私の略歴 1】

1927：6月生れ。

1934：7歳。脳膜炎となり左耳失聴。右聴力1/4 くらい。

1944：16歳。完全に失聴。

1948：21歳。エスペラントを紹介され、山賀勇先生宅の例会に時々出席。エスペラントは独学。

1950頃：日本各地、世界各地から機関紙などがたくさん来るので、見ているうちに小樽でも機関誌をと思って身内だけのつもりで出したのが LEONTODO 。

(89, junio, 30)

本連載の第1回分の要約は La Movado誌9月号に「『初期の世界語』出版の頃」と題して掲載が予定されています。本誌への連載を快諾された山本氏、LaMovado誌への要約掲載に尽力された同誌編集部^{編集部}の峰芳隆氏、この連載の仲介にあたられた星田淳氏に感謝いたします。(編集部)

Kiel infaneto eklernas lingvajn sonojn?

Acuŝi HOŜIDA (Tomakomai)

Ja mirinda estas la kapablo de infanoj lerni lingvon. Nur unu jaron post la naskiĝo ili komencas respondi al la gepatroj kaj paroli pri ĉio ĉirkaŭ si. Kaj dum nur jaro aŭ jaroj de tiam ili jam povas libere sin esprimi. Certe tion kaŭzas la forta, persista kaj verva scivolemo de infanoj pri ĉio ĉirkaŭ si.

Min interesis kiel eklernas lingvon la infano. Mi trovis, ke juna infaneto aŭdas parolsonojn (voĉojn), sed ne same kiel ni plenaĝuloj. Tie estas ia ŝanĝo de sonoj kaj troviĝas ia leĝo de fonetika ŝanĝiĝo.

Estante ĉirkaŭ dujara, mia dua filino komencis kanti per melodio kaj vortoj (?--sonoj), tute nekonataj al mi, kiel jene.



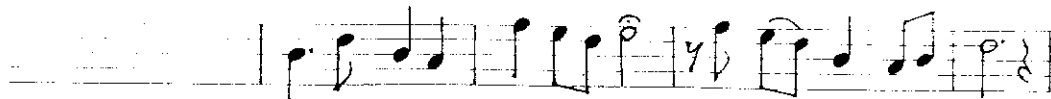
Bak-kun no jo de, O-ĉan no fuĵu, mi mi ju ua - i-don!

Unue mi tute ne komprenis, kion ŝi kantas. Sed baldaŭ mi rimarkis, ke ŝi ekkantas ĝin, kiam ŝi trovas basbalan ludon en televido. Do la kanto havas ian rilaton kun basbalo, mi supozis.

Pasis tempo - ĉu jaroj? Iam mi aŭdis melodion de televida dramo, jam longe dissendata. He! -- mi rimarkis. Tiu melodio -- kaj la ritmo havas ion familieran al mi! Ha, la dramo temas pri basbalo! Tiam mi povis kompreni, kion mia filino intencis imiti. Jen la parto de la origina teksto kaj ritmo.



Fak-ka ni moe-ru O - ĝa no ŝi-ru-ŝi



ju-ke ju-ke hju - ma, do-n - to ju- ke

Komparante la originalon al la infaneta, mi rimarkas kelkajn trajtojn.

Unue, interŝanĝiĝo de la konsonantoj "b" kaj "m". Tio ofte okazas en kaj inter la lingvoj korea, ĉina kaj japana. Kiel vi vidas, ĉi tie "makkani" (-puraruĝe) → "bakkunno". En la japana troviĝas ekzemploj: "samui" ↔ "sabui" (=malvarma), "samisii" ↔ "sabisii" (=soleca).

世界大会 (イギリス・ブライトン) に参加して

札幌 阿部 映子

国際語エスペラントの大会は毎年夏、世界のどこかで開催されます。今年はイギリスのブライトン、首都ロンドンから南へ汽車で約1時間の海岸に面した美しい保養地で、7月29日から8月5日まで開かれました。文字通り世界中のエスペランチストが集う大会で、日本からも約100人が参加、たぶん私はその中でも最も不真面目なエスペランチストの一人でしょう。なぜなら、単にイギリスに行きたかったのが参加の一番の動機なのだから。

エスペラントが1887年にポーランドのザメンホフ博士が世界の人びとの相互理解と平和を願って創りだした言葉なのは、今さら言うまでもないことですが、すでに百年以上も使われ続けており、言語としてはもう定着していると言ってもいいと思います。もちろんエスペラントを母語とする国民は世界中のどこにもいませんが、逆に言えば誰でもエスペラントを学び話すことでエスペランチストになれるのです。

ところで、1887年はシャーロック・ホームズの探偵物語の第一作である『緋色の研究』が発表された年でもあり、ミステリーファンの私としてはベーカー街221B (ここにホームズの事務所があったことになっている)を訪ねたり、ニュー・スコットランド・ヤード (ロンドン警察)の建物をながめたりするためにロンドンへ遊びに出かけて、かんじんの大会にはあまり参加しませんでした。

もちろん開会式には出席、あとは夕食会やチームズ河上流への1日観光、コンサート等の楽しいプログラムにばかり出て、討論会や会議にはまったく出席しませんでした。でも顔を会わせるとエスペランチスト同士、自然にあいさつの言葉ができてきます。「どこの町から来たの?」と話しかけられ「札幌から」と答えると、「ああ冬のオリンピックのあったところ」と知っている人が多くサッポロの知名度の高さには驚かされるし、香港の郵便局員の朱 (チュ) さんは雪まつりをTVで観たと言っていました。

多分、私がエスペラントを続けているのは、こういったとりとめのない雑談を世界中の人とできるからなのだと思います。それにしても、もっと話せる単語の数を増やして、もっと自由におしゃべりができるようになりたい、と普段の不勉強を反省しました。

今回の世界大会参加者は2000人を超えましたが私が声をかわしたのは、音楽好きのイタリア・ボローニアの老婦人、若いほっそりしたインドの青年、オランダ人夫妻、韓国の英語教師、美人のアメリカ女性等、そのほんの一部の人です。気楽にただちょっとおしゃべりするつもりで、また仲間らに会いに行くつもりで世界大会に参加するのもいいじゃないかと思っています (それにしても、休暇とお金が難問ですね)。

Trans lingva limo: Korea "munhua" → japana "bunka" (=kulturo).

Due, simpligo de komplika parto, sed, trie, impresan parton kun forta akcento restas en infana koro, ekzemple forte kantata "don!" restas fine de la infana kanto.

Jam ŝi nun estas dudek jara, neniom memoras pri sia transverkita (?) kanto de siaj infanaj tagoj.

読書ノートから

須藤 昭三

la Kaptito - Ĝis Kaptiĝo -
Orig. Oooka syōhei
Trad. Miyamoto masao

昨年のRO誌6月号で紹介された『戦後日本文学選集』（以下選集）に選定された作品の一編である。宮本正男氏訳によるこの一編は、1972年7・8月の2回に分けてRO誌に掲載され、それをコピーして保管しておいたものを最近読んだのである。前文で朝比賀昇氏が解説している（ただし、選集には前文はない）。“俘虜記”の題で書き続けた多くの俘虜体験記の断片をまとめて一卷とし、“俘虜記”と名づけ、最初の部分（これで有名になった）を“捉まるまで”とし巻頭においた、とある。

以下、朝比賀氏の解説を読みながら――、著者・大岡昇平は1909年生まれ、京都大学でフランス文学を勉強し、卒業後も会社勤め数社を変わりながらもスタンダールを研究し、多くの訳書がある。1944年徴兵され（35歳の二等兵）、フィリッピン島のミンドロ島へ送られる。所属していた中隊が1945年1月24日、米軍に攻撃され、翌日捕えられた。著書の示す通りである。

この著作で明確に描かれている一人の兵隊は、死に向って対決させる理性だけを確認しつつ死の瞬間まで明確な理性を保持しようと決意した。彼のスタイルの特性は、言ってみれば論理的正確性、詳細性、純粋性、それと誠実性である。それらを彼は確実に敬愛するスタンダールから学んだのであり――という

ことなのである。

あらずじは選集を読むことにすればよいし、文庫本を座右に置いてなら、より時間を忘れて読み進める。私の印象に残ったことを書くとすれば、著者の戦場での奇妙な運命、“Mi murmuris: “Por morti la akvo estas senbezona.” Kaj la gamelon mi forĵetis malproksimen.” 「死ぬのに水はいらねえ」と言って飯盒を捨ててしまう、しかしその後水を求めて彷徨することで三度死をまめがれる。また、“若い米兵を目の前に見ながら何故撃たなかったのか”、これらの情景も論理的に詳細に説明される。それから妙に印象に残ったのは、ノモンハン帰りの若い中尉のことであった。

日本語で読むとただ何となく読み過ぎてしまう箇所が一つひとつ詳細に指でたどるように読み進める。切なさなのか苦しきさなのかは別にして、私はエスペランティスト冥利を感じた。そんな読物で、これはある。付け加えるなら、昭和天皇の死について意見を聞きたかった作家の一人であった。

この本を読んだあと、“la lasta flugo al Parizo” (aŭtoro: Junichi WATANABE, trad: Ĝiger UJIKI) に“パリ行最終便”を読んだ。読み易い本である。内容は、まあ“痴話喧嘩”のようなものであるが、文章に気に入ったのがあって嬉しかった。水滴がガラスに着いて、溜ってくるとスーッと降りますね、するとガラスを通して向こう側が見える、そんなエスペラント訳部分とか、“ヤスコは一つうなずくとゆっくり目をあけた”とか“ヤスコはコーヒーを一口飲み、時計を見た”。エスペラント訳した文章の方がアムステルダム情景に合っているのかな。

あなたも読んでみては？ 楽しいよ！

(室蘭エスペラント会)

MALFERMITA LETERO

Samideanoj,

Per ĉi letero ni alvokas vin aliĝi al la "Internacia bojkoto, deklarita al la militludiloj". Ĝi jam disvastiĝis tra Usono, Kanado, Aŭstralio, Britio kaj en multaj eŭropaj ŝtatoj.

En pluraj landoj oni produktas grandegan kvanton da infanludiloj en formo de pistoloj, pafiloj, tankoj, militaviadiloj k.m.s. Niaj infanoj lidas per ĉi ludiloj. Kion ili lernas de plej frua infanaĝo? --- militi, mortpafi, mortigi.

Ankaŭ reklamaj filmoj pri tiuj ludiloj estas ofte projekciataj far televizioj kaj kino-firmaoj. Krome en Usono kaj Francio estas spektoblaj pentritaj filmoj kun ĉeftemo pri milito. Ili edukas la etulojn atendi senpacience la militon, enradikigas ĉe ili malamon kaj senton pri perforto.

Nun en pli ol 50 landoj estas permesataj tridek-minutaj televidsendoj, reklamantaj infanludilojn.

La multnombraj donitaĵoj de la sciencaj esploroj montras, ke similaj filmaj programoj kaj militludiloj efikas tre negative al la psika stato de la infano. Similajn esplorojn oni faris en Usono, Britio, Nederlando, Aŭstralio kaj Libano.

Lastatempe kelkaj entreprenoj ellaborantaj ludilojn, inkluzive de "Mattle" kaj "Casbro" --- gigantoj en ĉi sfero --- komunikis, ke estas kreita nova sistemo, konsistanta el armilo kaj komputilo. Per la speciale pretigita armilo la infano povas pafi la heroojn de la televidfilmo dum la elsendo. La komputilo, ligita al la pafilo difinas ĉu la infano "motigis" la malamikon aŭ la malamiko "mortigis" ĝin. Tiumaniere oni "ellaboras" la soldaton de la estonteco.

Ĝis 1984 en Usono ne estis permesate reklami televizie militludilojn. Sed la administrado de Regan forigis tiujn limigojn kaj ĉiam ankoraŭ la Kongreso ne povas kontraŭstarigi decidon. Pli da indigno tamen provokas la fakto, ke laŭ la malbona ekzemplo de Usono ekagis multaj el la tiel nomataj demokrataj landoj, kaj tiel transformis siajn televidsendojn en ilon propagandantan militon.

En Finnlando jam estas malpermesate produkti militludilojn, similan leĝon oni preparas en Usono dank' al la aktiva laboro de "Internacia bojkoto, deklarita al la militludiloj".

La redakcio de esperantlingva gazeto "Paco", oficiala organo de Mondpaca Esperantista Movado (MEM) alvokas ĉiujn esperantistojn, amikojn de Esperanto, ĉiujn homojn kiuj ne volas, ke niaj infanoj elkresku kruelaj, laŭtigi sian voĉon kontraŭ la militludiloj.

Sendu leterojn al la registaroj de viaj landoj! Postulu malpermeson de la infanaj militludiloj! Represigu nian leteron en la nacilingva gazetaro! Tempas. Ekagu!

Redakcio "Paco"

Responde al la red. de Paco, la red. de Heroldo de HELL represis la leteron supre ĉirkaŭstrekitan el Paco (1/1989), konsiderante, ke nia organo tute ne aspektas esperantlingva, sed "nacilingva". (serioza red.)

子づれミニ教室は超満員

札幌 堀 孝子

世間では知る人ぞ知るエスペラントの重要性も生れながらのオオモターノである私は、以前よりずーっと自覚しておりました。そして、いつの日かまじめにエスペラント学習にとり組まねば……と考えておりました。ところが、なかなかキッカケがつかめずにいるところへ大本のヤングミセス（子づれも可）のエスペラント・グループ結成のよびかけがあり、ふたつ返事で参加することになりました。

朝の掃除、洗濯を終えたあとの主婦のカルチャー・タイム 11時から14時まで、主食（おにぎり）など持ち寄りの、昼食をはさんだミニ講座が昨年秋に“生徒”5人と先生二人（山口紀代美さん、渡辺康子さん）で始まりました。とはいっても“ダブルこぶつき”、“シングルこぶつき”でメンバー宅持ち回りの教室はいつも超満員。

“Mi estas……”と音読の途中で子どもたちの“おしっこタイム”が入ったりしながらも、にぎやかで楽しい3時間は、あっという間に過ぎてしまいます。だんだん先生たちの教えになることがむずかしくなってきたり、宿題をやったときなど、おたがい助け合い、ときには子育ての話に脱線したりしながらも“La Teksto Unua”の第7課まですすんでまいりました。山口先生のエス語ゲームやだじゃれ暗記法でエス語に馴じみ、渡辺先生ののていねいな文法解説に納得しながら充実した学習に満足しております。

Unu Dio, Unu Mondo, Unu Interlingvo —— を唱えながら、書くことも出来なかった以前の私。Saluton! とあつまり、Ĝis la revido! と散会していく日常の簡単な言葉が口をついて出て来たときはエスペランティストの仲間入りをしたようで、

心密かに喜びをかみしめました。

まだまだエスペラント山の麓で遊んでいるような私ですが、いつの日か世界大会へと参加がかない、外国のひとたちと自由にお話しが出来ればと夢は大きく広がる昨今です。

*編集部注：山口紀代美さんが前号で紹介した「主婦グループの勉強会」のメンバーの堀さんにご寄稿をおねがいしました。前号ではテキストの第5課まで進んだとのことでしたが、今では第7課まで終了。継続は力、着実な歩みはきっと花を咲せることでしょう。

エスペラントおしゃべり会発足

札幌 山岸 悦子

エスペラントで自由なおしゃべりを楽しもうという仲間が集って、通称 Babilada Kunsido が始まりました。5月21日の第1回から6月11日、7月9日と月1回、日曜日、札幌で集っています。“Parolu nur esperante”の原則を（現在はまだ70%くらい？）守るほかは別に面倒なことはありません。

今回は9月17日（日）13時、札幌駅北口の札幌ステーションホテル地下の和食レストラン「味の館」で開きます。会費はいりませんが食事代だけ各自負担。

お問い合わせは山岸まで（Tel.011-511-2457）。

札幌エス会の例会会場変更と新講習会

札幌エスペラント会

例会の場所を8月から変更します。クリスチャンセンターに長い間お世話になりましたが、諸事情により次にかわります。お間違えのないよう！

場所：札幌市職員会館（中央区大通西19丁目）
地下鉄東西線西18丁目駅下車1番出口

時間：8月5日より土曜日午後1時～4時半

1:00 - 2:00 テキストによる講習

2:00 - 3:00 Karlo 高橋要一先生

3:00 - 4:30 会話 木村喜壬治先生

(時間割に変更があるかもしれません)

会費：一月千円で、どの講座をいくつか受けて
もおなじです。

連絡先：金森美子 tel. 011-643-3771

* * * *

「でも土曜日はちょっと……」という方のため
の講習会のお知らせです。

場所：札幌ステーションホテル 1階喫茶店

(北区北7西4 札幌駅旧北口すぐ)

日時：初回は8月21日(月)にありました。

内容は木村、高橋両先生による会話の
講習。月2回くらいの子定ですが、以
後の日時は下記へお問い合わせ下さい。

会費：喫茶代+若干 (お茶を飲みながらの
講習になります)。

連絡先：末永章子tel. 011-872-3425

どちらも門戸を広く開けています。「講習会に
しばらくでてないし……」、「みんなについてい
けるかどうか……」その他の心配まったく御無用。
まずは飛び込んでエスペラントに浸りましょう。
ひとりの参加が楽しい勉強会へと続くことを！

Por...ni grupiĝis en rond'

Lastatampe nova peresperanta
grupo estis fondita kun tri
membroj, relative junaj en nia
insulo kaj ĉiuj SAT-anoj en
Sapporo, kaj aktive agadas en la
urbo.

La grupo intencas utiligi nian
lingvon por interkomunikiĝo kaj
solidareco kun laboristoj kaj
subprematuloj ĉie en la mondo. Por

la celo ĝi preparas fondi sian
gazeteton, kvankam la preparado
iras malglate.

Tiuj grupanoj tute ne hezitas
trakti socialan problemon, kiun
ordinaraj "samideanoj" evitemas en
Esperantio. En ĝia kunsido estas
diskutata pri, ekzemple, la
atomcentralo en Tomari, "Sanga
Dimanĉo en Pekino", cirkonstancoj
de sindikatanoj de Kokuroo
(Laborista Sindikato de Nacia
Fervojo) k.a. Jes, ilia kunsido ne
estas "kurso", sed praktikejo
interŝanĝi penson unu la alian per
nia kara lingvo. Pro tio ili ankaŭ
ne hezitas erarojn en lingva
uzado.

Interesitoj turnu sin al
MIYAZAWA Naoto (TN 011-717-4189).
Sed vi tamen estus trudotaj tie
paroli tute en nia lingvo. Cetere,
ne estos bonvenigitaj dekstremulo
kaj policano.

La grupo nomiĝas Satana Grupo
en Sapporo, malgraŭ tio ke la
membroj havas anĝelan koron kaj
estas iom malsataj.

勝手に宣伝！『エスペラントの世界』

エスペラントが実際に活躍しているこ
とを紹介する雑誌です。友人、家族にエ
スペラントを理解してもらうのに最適！
図書館に寄贈するテもあります。

月刊、毎月16p.、年間購読料3000円

郵便振替 東京 4-151284

エスペラント通信社

次号は大会特集号

N-ro 32 は北海道大会(9/30)の際に発行の予定
で、大会特集号とし、連盟総会議案を掲載します。
地方会、個人会員で報告、提案、意見等があり
ましたら事務局へお送り下さい。また、編集部あ
てにそのコピーを別送して下さい。また、編集部あ
てにそのコピーを別送して下さい。また、編集部あ
す(ただし、9/16着分まで) 編集部

エスペラント訳された俳句（3）

小林一茶 1763-1827

- | | |
|--|--|
| <p>1. La luno lume
indikas mumebranĉojn
por rompi, ĉu ne?</p> <p>2. Ho, rampu! Ridu!
De ĉi maten' ekaĝos
jam jarojn vi du.</p> <p>3. Printemp' vesperas,
sed mont' Higasiyama
plu sin rivelas.</p> <p>4. Veturas same
sub pluvo de printempo
ĉevalo prame.</p> <p>5. Printemp' zefiras,
al Edo sumoistoj
nun piediras.</p> <p>6. Jam neĝ' ne restas,
vilaĝo montpieda
montdion festas.</p> <p>7. Nun neĝ' degelas,
sin kaŝos tuj; sur arbo
kolombo kveras.</p> <p>8. River' Sumida,
tra ŝosoj de salikoj
nun rivelita.</p> | <p>9. Ŝtonmuelilo,
salikoj - prilumataj
de luna brilo.</p> <p>10. Novjar' alvenis,
min per feliĉ' ne malpli
mezgrada benis.</p> <p>11. Hej, ran' skeleta,
malcede luktu, por vi
jen Issa preta.</p> <p>12. Ĉi tien nu do,
vi, orfa paserido,
al mi por ludo!</p> <p>1. 梅の花^こ愛を盗めとさす月か</p> <p>2. 這へ笑へ二つになるぞけさからは</p> <p>3. 春の日や暮れても見ゆる東山</p> <p>4. 一つ舟に馬も乗りけり春の雨</p> <p>5. 春風や東下りの角力取</p> <p>6. 雪どけやふもとの里の山祭</p> <p>7. 雪とけるとけると鳩の鳴く木かな</p> <p>8. 青柳の先みゆるぞや角田川</p> <p>9. 石臼に月さしかかる柳かな</p> <p>10. 目出度さもちう位なりおらが春</p> <p>11. やせ蛙負けるな一茶ここに在り</p> <p>12. 我と来てあそべや親のない雀</p> |
|--|--|

E訳は俳人クラブ編、1981年刊“Hajka Antologio”のものです。（木村喜壬治）

Hajka Antologio 俳人クラブ編、1981、220p、
1,200円。古典から現代までの集大成。巻末
に俳句とは何か、その歴史。

El Manjoo 宮本正男の名訳「万葉集」332首。
1971、110p、300円。

Utaaro de Takuboku 「一握の砂」「悲しき玩
具」の宮本正男抄訳。118p、1,000円。

Elpafu la sagon 世界の少数民族の口承詩。
T. Sekelj編訳、オランダ1983、187p、2300円。
（日本エス学会発行と指定して書店で注文を）

言葉の壁をなくすために

札幌 山口英里子

夏休みも終わりに近い、8月のある日、札幌で「日本エスペラント大会」が開かれました。

皆さんは“エスペラント語”というのを知っているでしょうか？ エスペラントとは“希望する人”という意味で、今から百年前、ポーランドのザメンホフという眼科医が完成した、世界共通語の事です。あまり知られてはいませんが、世界各国にエスペラント語を話す人が沢山います。最近の中国では、高等学校の選択科目に取り入れられた、とも聞きました。人がつくった言葉なので、英語の様に例外がなく1年間も勉強すれば講師になれるくらいだそうです。毎年、世界大会と日本大会は開かれています。たまたま母が勉強していたのでほんやりとは知っていて、何となく興味をもっていました。今回、札幌で開かれるのは、20年ぶりという事らしく、準備に頑張っていた母を見て、つい私も参加してみたのです。

会場に入って驚いた事は、中国のシンヨウの人、アメリカ人、フランス人、ポーランド人、ドイツ人、世界各地の色々な人々が、みんな同じ言葉で挨拶し、語り合い、そして笑っていたのでした。ブルガリアの人形劇、各国紹介などが温かい雰囲気の中で行われていました。髪の色も目の色も、住んでいる国も違う人達同志が一つの同じ言葉で笑ったり拍手を送ったりできるのです。この別世界の様な中にたった二・三時間いただけで、不思議にも“外国人”“日本人”という壁を感じなくなっている自分に気がつき、「これこそ平和の姿世界は一つだなあ」と強く感動しました。大会が終り「ジス・ラ・レブード」と別れてゆく人達の中には、泣いている人もいました。そして、「言葉の文化」という事についても、色々考えさせられました。

今の世の中は、何もかも大変便利になっています。飛行機に乗れば、地球の裏側まで一飛びです。交通機関だけではなく、科学・医学なども目覚ま

しい発達ぶりです。9月に開かれたソウルオリンピックでも世界各地に衛星中継されました。今やもう、地球は一つの国です。それなのに、色々な文化の発達ぶりに比べて、言葉の文化だけが取り残されているのではないのでしょうか？ 今、英語が世界共通語の様になってきていますが、私は昔から疑問に思っていました。

「なぜ、よその国の言葉を必死で覚えなければならぬのか？ 英語圏の人々は楽でいいなあ」

どんなに頑張った所で、生れた時から英語で育った英語の国の人にはかないません。私達も、3年間英語を習いましたが、向こうから外国人が来ても「あいさつするのがやっ」という語学力しかない人がほとんどではないのでしょうか？ 以前、私も道で外国人に話しかけられた事がありますが、“I can't speak English”と言うのが精一杯でした。

英語の国際化に反対している訳ではありません。私は、この夏の体験を通じて、言葉の文化についてももっと知りたい、そう思いました。

そして、いつの日にか世界のみんがあまり苦勞しないで言葉が通じ合い、“外国人”という意識をなくして、気軽に仲良くできる日がくればいいなあ、と考えています。

(札幌市立北辰中学校誌『北辰』1989年号より)

* * * *

昨年の日本大会に参加した山口英里子さん（現在は高校1年生）が母校の「主張発表会」で最優秀賞を受賞したことは前号でお知らせしました。今回はその全文を紹介いたします。山口さんのような本当に若い人たちがエスペラントに関心をもち、使い手にならなければ、ザメンホフの理想は遠いものになるでしょう。 (編集部)

la redakcio tulkore dankas al ĉarma knabino Ĥnjo kaj esperas, ke ŝi iam ĵetu sin en nian movadon belege. la Red.

88年度 第3回、第4回連盟役員会報告

第3回役員会は4月17日(月)18時30分から札幌駅地下の喫茶店で開かれた。出席は切替、渡辺、カワハラで、星田、児玉は所用のため欠席した。主要な議題は5月に開催される連盟合宿の実務の進行状況の検討。切替が合宿の総責任者として、プログラム、講師・現地との連絡等を担当し、渡辺が案内書を発送して合宿参加者を集約するなどを確認した。

第4回役員会は8月20日(日)、北海道大学文学部言語学教室で開かれた。役員会開催に先だつて、札幌駅北口の札幌ステーションホテル1階の喫茶店で今年の北海道大会の細部について連盟役員と札幌エス会役員らが協議した。連盟から星田、切替、カワハラ、渡辺、児玉(札幌エス会会長)の全役員、札幌エス会からは阿部映子、馬場恵美子、また Satana Grupo en Sapporoの宮沢直人も出席した。

この協議で第53回北海道エス大会の日程、会場、連盟総会の時間帯が了承されたほか、プログラム、参加費、担当分担などを決定した。

協議の最後に児玉から札幌エス会が招待した中国シェンヤンの趙氏の滞在日程が報告され、連盟も歓迎し、協力することを申し出た。

札幌エス会との協議のあと、北大に移動して16時20分から役員会を開催。児玉は所用のため出席できなかったが他の4名が出席して北海道大会連盟総会議案などを議題に20時20分まで討議した。

以下に討議の要点のみを記載する。

1. 現行の連盟会費は内部努力によって据え置く。
2. 機関誌編集に際してE文の「書き手」不足は深刻な問題で、現状ではE専門団体の機関誌の体をなしていないのではないのか。

3. 活動方針案では会員のE文章能力の向上を基本に据え、共同翻訳の提起も検討する。適切なテキストの研究、選定作業を開始する。
4. 新年度行事として、秋の勉強会(11月、場所未定)、冬の合宿(スキー場を想定)、春の合宿(富良野市を想定)を提案する。
5. 来年の北海道大会は9月、小樽市での開催の可能性を追究する。
6. 連盟規約各条について現状と照らし合わせた結果、規約改正の必要を一致して確認し、改正案を決定した。この改正案を連盟総会に提案する。
7. 次期役員を選考、推薦について意見を交換し、現役員は全員、次期も引き続き役員として連盟運営にあたる用意があること、その際、切替が兼務してきた会計業務については渡辺が兼務するのが最善であることを確認した。
8. 連盟の常設E通信講座を開設する。運営はすでに実績をもつ小樽エス協会に委託する。
9. 6月23日付で連盟への団体加盟申請のあった Satana Grupo en Sapporo(代表・宮沢直人、会員数3名、連盟会費前納済み)の連盟加盟を承認した。

(文責:カワハラ・カズヤ)

★エスペラント 通信講座

北海道エスペラント連盟常設、小樽エスペラント協会責任運営の新講座!

お近くにエスペラント会がない、入門講習会があっても出席できない、再入門したいという方、お待ちしております。

全10回 受講料無料!(要切手代)

お申込み、お問合わせは、返信用切手同封で、〒047 小樽市入船2-17-12

小樽エスペラント協会へ

88-89年 連盟会費受領者 (89/05-07)

赤倉正治、小熊 一、加賀谷勇、堀由美子
(上記4氏は札幌)。佐藤英治、宮沢直人(以
上の2氏は Satana Grupo en Sapporo)。

連盟機関誌新規購読者 (89/06 以降)

峰 芳隆 (兵庫県高砂市)

ご寄付ありがとうございます (89/06 以降)

峰 芳隆 (兵庫県高砂市=切手 248円)

山岸悦子 (札幌=1540円)

敬称略で記載しましたが、以上の会費納入、機
関誌購読、ご寄付をありがたく受領いたしました。

すでに札幌の木村喜壬治さん、留目雅之、留目
昌子ご夫妻から次年度の会費が届いています。大
会ご参加の折は次年度会費もお忘れなく。

なお、参院選直後に郵便振替料金が改「正」さ
れ、8月から実施されております。通常払込みの
場合、会費(2000円)納入の料金が60円になりま
した(10円値上がりです)。通常振替の料金は変
わりません。その一方で、「大口」の払込みの料
金はお安くなりました。そちらのほうもお待ちし
ております。

(事務局)

★ESPERANTO T-ĉemizoj

まだまだTシャツの季節だ! 道内、
全国から注文殺到、残部僅少、早者勝。

阿部商会特製のTシャツ(白地に緑で

★ ESPERANTO)に身を包み、PIVを片
手に、街に出よう! キマッテルウ!

1枚千円 1750円、SML指定で、
振替 小樽 8-6864 阿部映子 まで

Postmilita Japana antologio

大岡昇平『捉まるまで』、大江健三郎
『死者の奢り』、開高健『パニック』、
野坂昭如『火垂るの墓』など11篇を収め
た戦後文学選集。大阪(日本E図書刊行
会)、1988年、318p、3,000円。

La Lasta Flugo al Parizo

渡辺淳一『パリ行最終便』。植木茂訳。
東京、1988年、55p、500円。

連盟では現在、書籍の取次ぎをしてい
ません。書籍の注文は最寄りの書店でさ
れるのが便利です。送料がかかりません。

その場合、発行所はすべて「日本エス
ペラント学会」と指定してください。

La Movado

ラ・モバードを読もう!

関西、東海、九州、中四国の各E連盟
の共同機関誌だが、日本を代表する雑誌
のひとつである。

7月号に星田淳の「北海道連盟山部合
宿」「S-ano 山本昭二郎と leontodo」
の記事が。8月号は宮本正男追悼特集。

初等作文で「学生たちは民主化をのぞ
んでいるだけなのに、政府は銃弾で弾圧
した」という課題がだされる雑誌。

日本エスペラント界の良心、

輝く星、ラ・モバードを読もう!

月刊 年間購読料3200円。

申し込みは下記へ

振替 大阪 6-60436

ラ・モバード社

(この広告に hieroloj de E! 編集者が勝手に掲載したものです)

SALATO

☆住井すゑ『わたしの童話』（88年12月刊）。自作の「空になったかがみ」について「あそこに来てくへびの名まえはエスペラント語（国際共通語）ですし、やがて国家も解体されて一つになり、人類は協力し、協調しあっていこう、そういう方向にいかないかぎり破滅する。ここが分かれめだ、という思いで書いたんです」と語っている。

☆朝日88年07月12日夕刊に同日未明亡くなった宮本正男氏の訃報。「『日本語エスペラント辞典』の編著がある。わが国でただ一人の〔UEA〕名誉会員だった」。赤旗は88年07月13日付に。こちらは、治安維持法で検挙された獄中でエスペラント（国際語）を学んだこと、戦後関西E連盟を結成して現顧問であったことのほか、「……などの現代日本文学をエスペラントに訳して世界に紹介しました」など朝日より詳しい。宮本氏の死去は各紙で報じられたと聞くが編集部で確認したのは以上2紙だけ。

☆88年08月08日になって、赤旗が上記記事について、記事末尾に紹介された氏の同党への「支持」の仕方について「訂正」。 Kio okazis?

☆John WELLS, prof. pri fonetiko en la Univ. de Londonoが11月に北大言語学談話会の会合出席のために来道する。WELLS はUEAの新会長。

☆ Ainaj Jukaroj

アイヌの口承文学『ユーカラ』（知里幸恵日本語訳）を北海道連盟翻訳グループがエスペラント訳した第2版。アイヌ語文法解説・小辞典を増補した名著！

1988年、北海道エスペラント連盟刊

定価 1,000円 予 260円 事務局取扱

★ Heroldo de HEL

n-ro 31 (1989, julio-aŭgusto)

北海道エスペラント連盟機関誌 隔月刊

編集部： 004 札幌市白石区もみじ台東

1-1-6-304 カワハラ気付

事務局： 047 小樽市入船2丁目17-12

郵便振替口座： 小樽 0-17075

☆朝日88年07月13日夕刊に「珠算も国際語 エスペラントで指導」と、京都の岸川恭子がブライトンのUKでそろばんの実技指導するために出発したこと。「そろばんはエスペラントで SOROBANO（ソロバーノ）と言ひ、単語として認知済み」と紹介されている。

☆朝日88年07月16日「声」に苦小牧の星田淳の投書「苦悩を秘めた沈黙に胸痛む」が掲載された。

中国の旧知の友人から航空便が届いたが、封筒には検閲を考慮したのか架空の住所・氏名が書かれていた。手紙の中で彼は「わが国では大事件が続きました……。そして今、人民は苦悩を秘めて賢明な沈黙を守っています。しかし、私は『真理は必ず勝つ』ことを信じたい……」と記されていた。星田は「私も『真理は勝つ』ことを信じよう。そして『苦悩を秘めた沈黙』が長く続かないように、そして、いつか再び中国で、彼と自由に何でも語りあえるようになってほしいと思う」と結んでいる。なお星田の肩書は「エスペランチスト」。(本欄の協力者は豊蔵正吾さん、河原慶子さん)

★北海道大会関連記事掲載などのため発行がほぼひと月遅れました。お詫びします。私もブライトンに行っていました。(BE)

★E文原稿がないので発行できなかっただけです。書いてください。須藤さんの連載は道外からも好評。山本さんの新連載は4回の子定です。(KK)